

早稲田大学大学院 日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書

論 文 題 目

日本語教師が学生との語りを通して学んだこと

— 韓 国 人 留 学 生 ビ ョ ン ジ ン と 私 の ラ イ フ ス ト ー リ ー か ら —

重 信 三 和 子

2014 年 9 月

第1章 序論

筆者は日本語教師として 1992 年から都内の日本語学校で日本語を教えてきたが、そこで韓国の受験勉強の厳しさを口にする韓国人学生に数多く会った。韓国の子どもは良い大学に入るために夜遅くまで塾で勉強するのが普通で、必死に受験勉強をしてソウル市内の有名大学に合格できれば人生の成功者であり、合格できなければ大きな挫折感を味わうことになるようであった。この話を聞いたたびに私は、受験のために毎日勉強ばかりしてイヤにならないのだろうか？と疑問に感じて、そのような厳しい競争社会に育った若者はどのような考え方をするのだろうか？と彼らの意識を探ってみたいと思った。これが当研究の発端である。私が日本語学校で出会った韓国人学生たちの中には、入学当初は生気のない顔をしていても、2年間の日本語学校のカリキュラムを終え、留学試験でよい成績を残して意気揚々と進学していく学生がいた。彼らを見ていて、日本語を学ぶことが韓国社会で行き場を失った若者たちの救いのひとつになっているのではないかと感じた。子どもころから競争社会の中で生きることを余儀なくされてきた韓国人学生たちはどのような思いを抱えて日本に来たのだろうか。日本で日本語を学んだことで何かが変わったのだろうか。

本稿は、「日本語を学ぶこと」が留学生の人生にどのような意味をもつかを考えるとともに、そこから示唆される日本語教育的意義について考えるものである。日本に留学した一人の韓国人留学生のライフストーリーを通して、そこから見えてくる留学生の変容のプロセスを明らかにし、「日本語を学ぶこと」が一人の人間をどのように変えたのかを示していく。ここでいう「日本語を学ぶ」とは、日本語運用能力を獲得することだけではなく、日本語を使って日本で生活する上で学んだことも含まれる。ことばを学ぶことは教室の中だけに留まらず、「生活に埋め込まれている」(三代 2009a:92)のであり、留学生が生活すること、生きること(ライフ)の中で考えたことを理解することが留学生のことばの学びを理解することにつながるのである。留学生が日本で何を感じ、悩み、何を喜びとしていたかを知ることで、教師は彼らが本当に必要としていたものに気づき、それによって彼らに何を教えるのかを再考することができるだろう。そのため本稿では「日本語を学ぶこと」が留学生の人生にどのような意味があったかを考えるとともに、そこから日本語教師である私が何を学び、それをこれからの教育実践にどう生かしていくかを考えることを目的とする。本稿によって、留学生に日本語指導を行う日本語教師が自らの教育実践を振り返る機会となることを望むものである。

調査対象者のビョンジンは、韓国から来日し日本語学校で日本語を学んでから大学に進

学した留学生である。彼は母国では勉強が好きではなかったが、日本語を学ぶことで向学心が芽生え、努力の末に大学進学を果たした。私は彼が東京の日本語学校在籍時に日本語授業を担当していた日本語教師と学生として彼と出会った。彼は工業高校出身で、韓国では大学進学を望んでいなかったが、来日して熱心に日本語の学習に取り組む姿を見て「彼は日本に来てとても変わったのではないか」と感じた。彼に話を聞くことで「日本語を学ぶこと」が日本語学習者にとってどのような意味をもつのかが見えてくるのではないかと考えたのである。

研究の問いを以下のように設定する。

RQ1, 韓国人留学生ビョンジンは「日本語を学ぶこと」でどのように変わったか。

RQ2, 日本語教師である私はビョンジンのライフストーリーからどのような教育実践をしようと思うようになったか。

第2章 先行研究

留学生のライフストーリーを描いたものとして、2007、2008年には中山が、2009、2010年には三代が、それぞれ韓国人留学生のライフストーリーを描いた論文を発表している。三代(2009b)は韓国人留学生のライフストーリーを通して、コミュニティ参加の実感が留学生の学びにつながり、日本語がその過程を支えていることを論じた。

留学生に対する日本語教育については三代(2009a)が優れた指摘をしている。三代は、留学生の社会参入が今まで以上に期待されるなか「留学生生活を支えるための日本語教育という視点と、そのための留学生活と日本語教育を捉える研究の必要性」を訴え、留学生の言葉の学びを留学生活から考察する意義を説いている。三代はまた、本質主義を批判し社会構成主義の教育観に立つことで、従来の日本語教育研究のあり方に対し、3つの転換を迫っている。それは、①留学生生活を構成するものとしてのコミュニケーションが考察の対象となる、②能力でなく学びが考察の対象となる(学びとは「対象世界との出会いと対話であり、他者との出会いと対話であり、自己との出会いと対話である」(佐藤 1999:29)を指す)、③研究自体の社会的機能が考察の対象となる(社会的機能とは「研究の言説がどのように現実の問題を解決していける力になるか」(三代 2009a:92)を指す)ということである。

本稿は三代(2009a)の論考を理論的枠組みとして、留学生の生活と意識をつぶさに見ていくことによって、留学生の日本語の学びの意義を考え、留学生に対する日本語教育研究に

社会的機能を付与したいと考えている。

第3章 研究方法

ライフストーリー研究法はインタビューを通して「個人がこれまで歩んできた人生全体ないしはその一部に焦点をあわせて^{ホーリスティック}全体的に、その人自身の経験から社会や文化の諸相や変動を読み解こうとする」(桜井 2002 :14)のものであり、「それぞれの価値観や動機によって意味構成された主観的リアリティを明らかにすること」(桜井・小林 2005:50)を目的とする。留学生の「日本語を学ぶこと」が自らの人生にどのような意味があったかという問いには、留学生が主観的に捉えた日本留学における諸相を分析・考察することで明らかになると考え、ライフストーリー研究法を用いることにした。ライフストーリーは、〈いまーここ〉で繰り広げられる語り手と聞き手のインタビューによる相互行為によって生み出されるものだが、語りそのものを記述するだけでなく、調査者が調査の重要な対象となる(桜井 2002)。桜井らは、語り手の人生や経験を理解し、解釈するためには「直接、対面しているもうひとつの生、聞き手であり調査研究している『自己』の人生」(桜井・小林 2005:8)が根本的に必要だと言う。そこで聞き手である私自身がどのような教育観を持つどのような「自己」であるかを明らかにするために、私の「自分誌」を記述した。「自分誌」は私が自分のライフを振り返って、自分の考え方や価値観、言語教育観、人生観の形成に影響を及ぼしたと考えられることを自分で判断した上で記述した。その際、留意したことは、①自分の生き方や考え方に影響を及ぼしたこと、②留学や言葉を学ぶことに関わること、③教育、または日本語教育に関係があること、を書くことである。なお、「ビョンジンのライフストーリー」は語り手と聞き手のインタビューにより構成されているが、「私のライフストーリー」は自分自身による自叙伝的記述であるため、「ライフストーリー」の成り立ちが異なっている。本稿では、どちらも「ライフ(人生)」に関わるストーリーであるという意味合いにおいてあえて「ライフストーリー」として提示している。

第4章 ビョンジンのライフストーリー

ビョンジンは1985年に韓国のソウルで生まれた。彼は高校を卒業するまで勉強を楽しみと思えなかった。日本語を学び始めてから勉強が面白いと思うようになり、日本に留学することを決めた。日本語学校で新聞配達をしながら日本語を学び始めると、やればやるほどわかるようになることで達成感を感じ、教師からほめられたことで満足感も感じるよ

うになった。このとき彼は学ぶ喜びを初めて感じる事が出来た。日本語学校に通う毎日
は楽ではなかったが、彼にとって充実感を感じる事ができた。ビョンジンは、周りの人
びとに励まされて日本で大学にいきたいと思うようになり、そのために自分が苦手だった
「文を書く」ことに挑戦する。しかし彼は自分が考えたことを文にして書くことができな
いことを知り、それを乗り越えるために文章を読み、自分の考えを書くことで「日本語が
できる自分」を獲得していった。大学に入学して目標を達成したと感じたビョンジンは、
入学したとたんに勉強する楽しさを失ってしまう。韓国人のコミュニティに入り浸って留
学の意味を見失いつつあったが、このままでは日本人の友だちができないと気づき、積極
的に日本人と関わっていきこうとした。そうして自分が出会ったことのないような価値観の
異なる人々に出会い、自分の価値観を捉え直す経験をした。さらに就職活動では自国を客
観的に見られるようになった。このような日本での経験から自分は成長したと感ぜられる
ようになっていた。

ビョンジンは日本での就職が決まらなかったことに加え、日本語が十全に理解できない
ことから生じる居心地の悪さを感じて帰国を決める。帰国して就職活動を行うが、やりた
いことを優先したくてもできない現実に直面した。就職活動の挫折から自分に自信を失っ
たビョンジンは、自分に何ができるかを考え直した結果、自分が自信をもって「これがで
きる」と思えるものは「日本語」だと気づいた。「日本語ができること」はビョンジンのア
イデンティティを支えるものになっていたのである。自らの努力で「日本語ができる自分」
を獲得していったことは彼の人生の中で成功体験として刻まれ、「やればできる」という自
信の獲得につながった。それによって彼は、これからの人生において困難を乗り越えて目
標を目指そうとする意欲を持つことができるようになったのである。

第5章 私のライフストーリー

第1節では、大学時代から現在に至るまでの自分史を、第2節では、私の言語教育観を
形作ってきた外国語学習の経験を、第3節では、日本語教師になってからの日本語教育観
について示している。以下は第3節からの抜粋である。

私が日本語教員養成所で習った日本語の指導法は「追い込み法」(山田 1990)と言われ
る文法の導入方法だった。私にとって日本語を教えるとは「学習者に日本語の文法を理解
させること」だった。しかし文法を教えるのが得意ではなかった私は日本語教師失格かな
と内心では感じていた。それでも私が日本語教師を続けていたのは、「異文化」との出会い

に魅力を感じていたからだった。誰かと出会った時、私にはいつも〈この人はどういう人だろう?〉という単純な疑問がある。この人はどのようなことを考え、どのように生きているのか、「この人」と「わたし」はどう違うのか。そのような「人」に対する興味が私の原動力である。そんな私にとって「日本語教師」は自分とは異なる背景をもつ「人」と接することのできる、願ってもない職業だと感じていた。日本語教師になったときは、日本語教育の世界がどうなっているかなど知らなかった。日本語学校に勤めるようになってから日本語能力試験の存在を知り、学校ではその対策を中心にして授業を行っていることを知った。日本語学校で試験対策の授業を自分がするようになってから、「これは私が考えていた日本語教育とは違う」と感じた。しかし「自分が考えていた日本語教育」にどこにいけば会えるのかわからないまま、試験対策の日本語授業を続けていたのである。

早稲田大学日本語教育研究科（日研）に入学して1期目の実践研究で、ゼロビギナーの中国人の中学生に対しテキストを使わない日本語の授業を試みる機会があった。構造シラバスに依らない日本語指導とはどうすれば成立するのか、ペアで指導にあたった日研生と何度も話し合った。そして、大切なことはことばの理解ではなくて、「あなたと私が今ここで熱くコミュニケーションを行っている」ことなのだと思えるようになった。日本語の授業とは「学習者の言いたいこと」に耳を傾けながら熱いやり取りを行っていくものなのだ実感できるようになった。日研での授業を通し、日本語学校における私の実践は変わっていった。文法の提出順を気にせず自然な会話を意識するようになった。授業で個人的な話を積極的にするようになったし、無理に教科書を終わらせようとしなくなった。それから私は日本語学校の授業で、「学習者の言いたいこと」を授業でどのように引き出せばいいかいつも考えるようになった。

第6章 考察

ビョンジンは日本語を学ぶことによって、自分が自信をもって「これができる」と思えるものは「日本語」だと思えるようになり、「日本語が話せる自分」にアイデンティティを見出した。彼はそれを自分が努力をした結果として手に入れた。彼にとって「日本語」は自らの努力により獲得したことばである。彼は日本で日本語を使って積極的にコミュニケーションを行うことで新しい価値観に出会い、自らが所属する社会と異なる社会のありように気づいていった。これらは彼の中で人生の経験として刻まれた。「書くこと（＝考えること）を実践した」ことも、ビョンジンの人生にとって大きな意味があった。ことばを使っ

て自分の考えを表わさなければ自分の思いを他者に伝えられないことを、ことば（日本語）を学ぶことにより、学んだのである。彼はこれによって自分の人生を「考えない人生」から「考える人生」に変え、主体的に生きていくことができるだろう。

細川(2012)によると、日本語教育の目的は「人を育てること」である。なぜなら日本語教育の目的が「日本語能力」の育成にあるならば、その教育/学習の対象は「言語活動」に向けられなければならないはずだ。しかし人間の言語活動は、自己と他者の関係であると同時に、自己の思考や内省をも含む、複雑で重層的な活動であり、このような個人の中に内在する「言語活動」は、不可視で動的なものであるから、その一部を分析的に取り出してそれを「日本語能力」であると言うことはできないからだとする。そして日本語教育を行う目的は、個人の一部の能力を育成するという立場ではなく、全人的な立場で「どのような人材を育成するか」ということであり、それは「学習者自身が、どのような社会の中で、どのような個人としてあるべきか」という問いであるとしている。(p.200~202)

私がビョンジンの語りから学んだことは「教室で、どのように生きていくか（生きてきたか）を考えることが、学生のこれからの人生につながるのではないかと気づいた」ことである。留学生にとって留学は一生続くものではなく、留学後の人生をどう生きていったらいいかという命題といつも背中合わせである。人は誰もが社会的な存在であり、社会と関わらずに生きていくことはできない。この場合の社会とは、国や学校や地域などの自分を取り巻く環境を指す。留学生は日本に留まるにせよ、帰国するにせよ、自らが帰属する社会とどのように関わっていくかを考えなければならない。日本語教師はそれを考える機会を教室で作ることができる。私たち日本語教師は、帰属する社会の中でどのような役割を果たすことができるかを考える人材を育てるという視点に立って、留学生に対する教育実践を行わなければならないだろう。

私は日本語の授業では「学習者の言いたいこと」に耳を傾け、熱いやり取りを行いながら「その人らしいコミュニケーション」をどのように引き出すことができるかを考えてきたが、これまで個人と社会を結び付けることにはほとんど目が向いていなかった。ビョンジンが日本語学校に在籍していたときは「その人らしいコミュニケーション」すら意識せず、彼に「考える」機会を与えることもしていなかった。しかしビョンジンのライフストーリーを通して、留学生と社会を結び付ける実践を行うことが自らの社会的責任なのだと思えるようになった。これからは日本語教育の場で、自分も含め、場が集った者たちが今の社会に何を感じ、社会の中でどのように生きていくか、自分が社会の中で何ができるか

をしっかりと考えることのできる実践を行っていきたい。そのような実践によって、日本語を学んだ個人が自分と社会との関わりを意識し、よりよい社会のために何ができるかを考えることのできる人を育てることができよう。それが日本語教師として私ができる社会実践なのである。その成果のひとつとして本研究の発端となった「韓国の教育への違和感」が当事者によって改善されていくことを願うのである。

【参考文献】

- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 桜井厚・小林多寿子(編)(2005)『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房
- 佐藤学(1999)『学びの快樂—ダイアログへ』世織書房
- 中山亜紀子(2007)「韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴」—「自分らしさ」という視点から 『阪大日本語研究』(19)
- 中山亜紀子(2008)「韓国人留学生のライフストーリーから見る留学の満足」大学生活に対する期待との関わりから 『阪大日本語研究』(20)
- 細川英雄(2012)「コミュニケーション能力育成批判—ことばの学びとは何か」『「ことばの市民」になる—言語文化教育学思想と実践』ココ出版 p.199-204
- 三代純平(2009a)「留学生活を支えるための日本語教育とその研究の課題」『言語文化教育研究』7,8 p.65-99
- 三代純平(2009b)「コミュニティへの参加の実感という日本語の学び—韓国人留学生のライフストーリー調査から」『早稲田日本語教育学』6 p.1-14
- 三代純平(2010)「留学生活における言葉の学びと日本語教育—韓国人留学生のライフストーリーから—」早稲田大学日本語教育研究科博士学位論文
- 山田あきこ(1990)「非母語指導における「追い込み法」を考える—コミュニケーション能力養成へ向けて—」-東京国際大学論叢 42